

首相の伊勢神宮参拝に抗議します

内閣総理大臣 安倍晋三殿

安倍晋三首相は、今年の1月5日に岸田文雄外相、中谷元防衛相、森山裕農相、甘利明経済再生担当相をはじめとする9閣僚を同行して伊勢神宮の外宮、内宮の参拝を行った。同時に世耕弘成、萩生田光一両官房副長官、鈴木英敬三重県知事、同県選出の自民党国会議員、三重県会議員らを同行させて、これらが国政・県政の代表であることを印象付けた。首相、閣僚、三重県知事、三重県議員が参拝を行うことは、近年の恒例行事となりつつある。これらの行為は、日本国憲法99条の憲法尊重擁護義務が課せられた国政・県政を担う者にとって日本国憲法20条3項の政教分離原則に違反する行為であり、かかる違憲行為をあたかも当然行うべき恒例行事であるかのように定着させようとしている。これは見過ごすことのできない由々しき事態である。

特に伊勢神宮は、戦前戦時下において、全国民に対して天皇を神として参拝させ、天皇の命令によって行う戦争に命をささげる（戦死する）ことを最高の善であると教化するために靖国神社と並んで主要な役割を担った神社である。今も尚、天照大神を祭神として祭る同神社に、国政の長が年頭の参拝を慣例化させることは、天皇のために命をささげることを日本国民の最高善とする戦前回帰の価値観を再教化させようという意図が見られる。

安倍首相は、参拝後の記者会見にて、今年5月に三重県志摩市を会場に予定されている主要国首脳会議開催に触れ、「せっかくの機会なので、伊勢神宮をはじめ日本の伝統や文化、美しい自然を存分に味わっていただきたい」と述べた。その発言には戦時下において軍国主義を教化する役割を担った伊勢神宮参拝を、あたかも日本を代表する伝統と文化であるかのように主張し、「日本の伝統と文化を重んじる」という名目で宗教行事への参列を各国首脳にまで求めているように思われる。戦前戦時下においては、これらの宗教行事の参加を、「国民にとっての当然の儀礼」という言葉ですり替えて、実質的な宗教行事参加を強制した。同様に神道行事の参列を「伝統・文化」という言葉によってすり替えて、各国首脳に参列させることも、言葉のすり替えによる宗教行事参加強制と性質を一つにするものである。このことは、やがて全国民に例外なく、「日本の歴史・伝統・文化」という名目で実質的な神道行事の参加を再び強制することに道を開くことを危惧する。

憲法尊重擁護義務を負わされている首相・閣僚・県知事は、政治を代表する者として、歴史の反省に立ち、政教分離原則を重んじ、以後伊勢神宮参拝を行わないよう強く求める。

2016年1月12日

日本長老教会社会委員会

委員長 星出卓也